

オーストラリア・クイーンズランド州の 入試改革

大学入試センター
平 直樹

1 はじめに

クイーンズランド州後期中等教育・教育課程・評価委員会（BSSSS: Board of Senior Secondary School Studies Queensland）の事務局長ピットマン氏は、お見かけしたところ50代半ば位の大柄で恰幅のよい方で、要職についておられるにもかかわらず親しみ易く、人懐っこい笑顔が印象的な陽気な紳士であった。国際シンポジウムにおけるピットマン氏の講演は、今、まさに進行中の斬新な改革を現場から生々しく伝えるものであり、その内容は様々な立場で大学入試に取り組んでおられる聴衆の琴線に触れるものであったように感じられた。

本稿は、国際シンポジウムにおけるピットマン氏の講演記録を基に、クイーンズランド州で行われている大学入試改革の試みについて筆者がまとめたものである。講演内容の一部だけでも、その場の雰囲気とともに読者にお伝えできれば幸いである。

2 改革の背景

クイーンズランド州はオーストラリアの北東部に位置し、約170万km²という広大な土地に約300万人の人口を有している。連邦を構成する6つの州の一つである。オーストラリアにおいては中等教育までの教育に対する権限は州にある。州毎に文部省（教育省）が置かれており、州内では中央集権的なシステムがとられている。大学入学についても、州単位に独自の制度が取られている。オーストラ

リア大使館の資料によると、クイーンズランド州の高等教育機関は、1993年の時点で大学、単科大学合わせて14校であり、その他にTAFE（Technical And Further Education）と呼ばれる専門学校が存在している。1994年の時点でTAFEは16校となっている。

クイーンズランド州の大学入試制度改革の背景にあるのは、やはり高等教育の大衆化と進学競争の発生である。クイーンズランド州では、かつては中等教育修了者は、高等教育機関への進学と就職とを自由に選択することができた。ところが、高等教育機関へ進学希望者の増加に伴い、1970年頃を境に進学希望者数が入学定員を上回るようになった。そこで各高等教育機関毎に入学者選抜が行なわれるようになり、我が国にも共通してみられるような様々な弊害が現れるようになってきたのである。現在では社会人入学も盛んなようである。

このような社会的な背景に基づき、1990年代に入って新しい大学入学者選抜システムがスタートしたのである。

3 新しい制度の特徴

クイーンズランド州の新しい制度は、様々な面でユニークな特徴を持つ。そして、特に後期中等教育機関（日本とは制度に違いがあり、日本の高等学校の概念と厳密には対応しないと思われるが、簡便な記述のために、以下、「高校」と表記する）からの進学者を念頭に置いた場合、それらの特徴は「中等教育

の多様化の促進と選抜の公平性の両立」という理念を実現するために工夫されたものだと思う。

中等教育の重視は、選抜資料としての高校成績の重視に現れている。それも、総合得点や評定平均のような形で単一の指標ではなく、様々な角度から分析された指標群を選抜資料として用いるのである。それらは総合的に、「生徒教育プロフィール (Student Education Profile)」と呼ばれている。

高校での学業成績の多様な情報を選抜に生かすためには、後期中等教育における各科目について入念なカリキュラム分析が行なわれている。すなわち、「プロフィール」と言っても、単純に科目ごとの成績がそのまま利用されるだけではない。科目ごとの成績が後述するディメンジョン・システムに基づいて分解・再統合され、指標化されるのである。また、その情報は選抜において多段階的に利用されていることも注目しなければならない。

さらに、選抜の公平性の確保のために、成績の等化のための共通テストが実施されている。

以上のような方法による入学者選抜を実際実施するには膨大な手間がかかる。到底個々の大学や学部のみでの努力で行えるものではない。したがって、それを実現して実施するために、選抜情報を管理する専門機関がおかれている。

なお、このような制度は中等教育機関と高等教育機関との綿密な連携により、両者の合意の下に形成されたものであるということであった。

以下、新しい選抜システムについて、紙面の許す限り、筆者の理解した範囲でできるだけ具体的に解説する。

4 入学者選抜の専門機関

制度的に見た場合改革の第1点は、先述したように入学者の選抜主体を個々の高等教育

機関から専門の管理機関へと移行したことである。高等教育入学センター (Queensland Tertiary Admissions Centre) と呼ばれる機関が、高等教育機関への選抜の実務を行っている。

高校からの進学希望者に関しては、ピットマン氏の所属する後期中等教育・教育課程・評価委員会 (BSSSS) が、高等教育志願センターに選抜資料の提供を行う役割を担っている。

5 後期中等教育の多様性

言うまでもないことであるが、後期中等教育の目的は高等教育の準備だけではない。また、その一方で高等教育の入学者選抜のあり方が中等教育へ何らかの影響を与えることも不可避の宿命である。

クイーンズランド州の新しい制度の根底には、選抜システムが中等教育に与える影響 (backwash effect) をできるだけ小さく抑えようという考え方がある。すなわち、大学入学のための受験勉強によって高校での学習が偏ることがないように、高校においてバランスの取れたカリキュラムを維持できる制度を目指そうという試みである。

大学入学志願に用いられる資料としては、高校では50余りの科目が用意されている。クイーンズランド州においては、高校時代に概ね5～6科目を履修するのが普通であるそうだが、各生徒の科目履修パターンは多様である。大学の学部によっては必修とされる科目があるにも関わらず、約27,000名の高校生の科目履修パターンは約12,000種類にも及んだという。ただし、約80%の履修パターンは主要な32科目でカバーされている。

このような形で中等教育の多様性を保ちながら個々の生徒に対しては偏った学習を防ぎ、選抜のための多様な成績情報をどのようにして公平に評価するかということが選抜における大きな課題となるのである。すなわち、大

学の入学要件としてどのようなパターンの学習を要求し、また、様々な学校で異なる科目を履修してきた生徒の成績を、どのような形で公平な選抜資料とするのかという問題である。先述したように、この課題をクリアするために教育カリキュラムが綿密に精査されて、科目の履修内容にまで踏み込んだシステムが工夫されているのである。

6 ディメンジョン・システム (dimension system)

クイーンズランド州においては、科目ごとの成績がそのまま選抜資料として用いられるわけではない。まず、前提として、異なる科目同士が独立な学習内容を持つのではなく、学習を通じて身につけることができる技能は部分的に共通の性質がある、という中等教育カリキュラムに関連した学習観があるように思われる。そして、それを評価可能な形で数量化して表現したものがディメンジョン・システムと呼ばれるものである。

具体的には、高校での履修内容に関して、以下のようにフィールドと呼ばれる5つのディメンジョンが設けられている。

フィールドA：長文による表現、アイデアの複雑な分析・統合

フィールドB：短い文章によるコミュニケーション、読解・基礎英語表現

フィールドC：基礎的な数学、簡単な計算、グラフ・表の解釈

フィールドD：複雑な課題を解くこと、数学の記号や抽象課題

フィールドE：実践的パフォーマンス、身体的または創造的アート、表現技能

それぞれの科目は、シラバスの入念な分析に基づき、5つのフィールドに持つ重みが決められている。例を挙げるならば、「英語」

はAが5、Bが5、Cが1、Dが0、Eが4であるのに対し、「数学I」ではAが0、Bが1、Cが5、Dが5、Eが0、といった具合である。すなわち、この2科目を比較したとき、重みの総和は英語が大きい。しかし、個々のフィールドでは、これら2つの科目の間に、学習内容が重ならない部分と重みの大きさが異なる部分があると評価されている。クイーンズランド州では、50余りの全ての科目に対して、このような形での数値による具体的な重みづけがなされているのである。

以上のことから、高等教育への進学を目指す者にとっては、どのフィールドに大きな重みを持つ科目を重点的に勉強するかが重要なことになってくると推察される。

7 OPとFP

選抜資料としての学業成績は、全体的な順位(OP: overall position)と先述のフィールドにおける順位(FP: field position)として利用される。前者が志願者の総合的な学力程度を表し、後者が学力のプロフィールを構成すると考えてよい。最初にOP、次にFPの算出法について概説する。

OPの算出法は以下の通りである。

- (1) それぞれの高校で、科目ごとの学業成績が他の生徒達と相対的に評価される。成績は順位と科目ごとの凸凹で表される。
- (2) それぞれの科目群ごとに、各科目の履修者の尺度化用テスト(QCS:後述)の成績を用いて科目間の調整を行う。
- (3) 「上位5科目」の調整後の平均を用いて学校内でのOPを算出する。
- (4) 上記の結果を基に、尺度化用テストの成績を用いて学校間の調整を行う。
- (5) 以上の結果は、1(最高)~25(最低)の25段階で評価される。

現状では、大学入試の選抜資料としての高

校成績の利用は、我が国ではあまり進んでいないように思われる。その一つの理由は、複数の高校の資料をどのように調整すればよいかという課題の難しさにあるように思われる。クイーンズランド州では、履修科目間の調整と高校間の調整を尺度化用テストの結果を用いて行っているのが特徴と言える。

次に、FPの算出法であるが、順位がフィールドごとに表される以外は、ほとんどのプロセスがOPと同じである。しかしながら、以下の点で異なっている。

- (1) 先述したように、個々の科目に重みが掛けられる。
- (2) フィールドごとに尺度化テストの異なる部分が用いられる。
- (3) 2段階の尺度化は行われない。

8 尺度化用テストとカリキュラム共通要素

尺度化用テスト（QCS）は正式にはクイーンズランド・コア・スキルズ・テスト

（Queensland Core Skills Test）と呼ばれている。カリキュラム横断の州全体で行う認知技能テストであり、1年に1回高校3年生に対して実施される。この結果が、先述の科目や学校間の調整に用いられるのである。

このテストで測定される能力は、各カリキュラムの共通要素（CCEs: The Queensland common curriculum elements）と呼ばれるものである。CCEsとは、高校のシラバスを精査して得られた複数の科目間に共通の認知的要素である。49の要素が紙筆形式のテスト（paper-and-pencil test）でテスト可能であり、9要素は多肢選択形式以外の方法でテスト可能であるとされている。

テストの解答様式は、(1)長文のエッセイ、(2)多肢選択問題、(3)短答式問題の3種類から成り、2日間にわたって4種類のテストが実施される。

9 選抜のプロセス

以上のようにして得られた選抜資料は、実際の選抜プロセスの中で多段階的に用いられている。クイーンズランド州の高等教育機関は、我が国と同様に定員制を採っているおり、定員と同数の志願者が最終的に合格と判定されるのである。

第1の段階は、募集側が用意する必修科目との照合である。志願者は、要求された必修科目を履修し、水準以上の成績を残していなければならない。

第2段階は、志願者の総合的な学力水準をみるためのOPの値である。OPが高い順に、募集定員までの人数が合格となる。しかしながら、ここで注意しなければならないのは、OPは25段階評価であり、日本のようなテスト得点をそのまま利用するシステムと比べると、評価尺度の刻みがかなり粗いのである。当然、定員前後で同順位が現れる。そこで、第3段階の選抜が行われる。

第3段階の選抜資料はFPである。OPで同順位の者の中から、指定されたフィールドのFPが高い順に合格となる。さらに同順位の者が有る場合、次のフィールドのFPが用いられる。なお、当該募集単位がどのフィールドを選抜に用いるのかという情報は、選抜実施の2年半ほど前に文書で発表される。

通常、以上の3段階で選抜が終了するが、必要ならば、最後の段階の選抜が行われる。そこで利用される資料は、ここまでの段階で直接利用されていないものだそうである。

いずれにしても、特徴的なのは、一度の判定で合否が一括して定められるのではなく、段階的、部分的に合否が決められていくことである。また、各段階で用いられる選抜資料は「生徒教育プロフィール」の一部であり、さらに、同じ部分が複数の段階で用いられることはないということである。

10 まとめ

我が国においては、「学力の多様化」はプラスのイメージで、「多段階選抜」はマイナスのイメージで語られることが多い。しかしながら、実際には、それらの概念はそれぞれ「入試科目数の削減」「足切り」の言い換えである場合がほとんどである。その場合、「教育の多様化の促進」は「大学生の基礎学力の不足や偏り」、「多段階選抜の否定」は「個別試験における試験実施者の過重負担」という副作用が必然的に伴う。池田・平（1995）は合否ボーダー層の概念を入試に取り入れ、多段階選抜法の中で活用することにより、総合的な基礎学力の重視と学力の多様性を大学入学者選抜に活用することを提案した。クイーンズランド州の改革は、まさにその理念を制度的に実現しようとした画期的な試みであると位置づけることができる。

歴史的背景や教育に関する社会的風土の相違、人口規模等を考えると、クイーンズランド州のシステムをそのまま我が国で取り入れることはおそらく不可能であろう。例えば、「認知技能テストによる学校間格差の調整」は「高校の序列づけ」といった形での世論の猛反発を招くことが予想される。

しかしながら、中等教育以下の教育内容の独自性と受験者の学力の多様な個性を大切にしつつ、多面的な情報を選抜資料として利用しようとする姿勢には大いに学ぶべきものがあると思われる。我が国における後期中等教育である高校教育と、高等教育との新しい連携を図っていく上で、「クイーンズランド方式」は大変参考になると思われる。

文献

池田輝政・平 直樹 1995「合否ボーダー層における多面的評価法」大学入試フォーラム、No.18、5-16。